

【泉大津市長賞】

くさんの毛布

東有可・泉大津市

物心がついたころにはすでに、くさんの毛布は私のおふとんのところにあった。

それは緑と白をベースとしたくすんだ色合いのもので、まんなかにとぼけた顔をしたくさんが配置されていた。

私は、とてもおとなしい子どもだった。そのため、思つたことを口に出せなくてくやしいおもい、さびしいおもいをすることがたくさんあつた。

そんなときは、くさんの毛布と、母の手をぎゅっと握つた。体をもぞもぞと動かしていいる私に気付いて、母はいつも、手をそつと握つてくれた。でも疲れているのか、いつも先に寝てしまうのは母の方だった。

いっぽう父からは、こんなことを言われた。

「たとえ眠くなくても、目をつぶつていればいつの間にか寝ているから、とにかく目をつぶりなさい。もし眠れなかつたとしても体を横にしているというだけで疲れはとれてくれるから大丈夫だ。」と。

当時の私は、そのことばに、

「それって、ごちやごちや言わず早く寝なさいってことでしょう。」

と突き放されたように聞こえた。父は普段、明るく陽気なひとなので余計にきつく感じた。

だが、この父の教えは効果てきめんで、半信半疑で毛布を抱きしめながら目をとじていると、いつのまにか朝になつていた。

今まで眠れない夜にはこの父の言葉を思い出す。魔法にかかつたかのようにいつのまにか眠りにつくことができるのだ。

幼稚園に通つていたときは、とあるテレビキヤラクターが大好きでかぶりつくように見ていた。赤やピンクや黄色、明るい色をたくさん使つてアニメに魅了された。もちろんグッズもたくさん買ってもらつたはずである。

しかし、それとは対極ともいえるようなくさんの毛布を、ずっと愛用していた。とにかくあつたかいのである。小学校高学年くらいになると、

「この毛布、クマがださい。」と悪態をついていたが、それでも手放さなかつた。

大学生になり、一人暮らしすることになつたときも、寒いときのためにくさんの毛布を持つて行つた。

はじめての一人暮らし。それまでクラブや勉強に精を出していたため、家の手伝いなんてほとんどしなかつた私。今まで私が学校でクラブや勉強を思いつきりできたのは家事を一生懸命してくれていた母や、家族のために働いてくれた父の支えがあつたからだつたんだ、とこのときに本当に思い知つた。一人暮らしをはじめて早々に母や父、家族のみんな

に会いたくなつた。

今までには家に帰つたらとにかく誰かがいたが、一人暮らしの部屋、帰つたつてだれもない

ない。

そのさみしさを紛らわせてくれたのは、くまさんの毛布だった。ベッド用マットも、か
けぶとも新生活用に買い揃えたものだつたが、くまさんの毛布があることで、実家のふ
とんで寝ているような感覚ですぐに眠りにおちることができた。

くまさんの毛布は、生地がしつかりしたものだからあたたかい。ずっとそう思つていた。
だが、それだけではないということに気付いた。くまさんの毛布と一緒に父母の心のあ
たたかさを一緒に思い出すから、あたたかく感じるんだ、ということに。

私は今年結婚した。くまさんの毛布は社会人になってからもたまに使つたりしていたが、
結婚すると決まってすぐ、不思議なことに毛布の縁がほどけて使えなくなつてしまつた。
結婚したのは、柔道をやつていたことのある、とても大柄な人である。友人に彼の写真

を見せたところ、

「くまさん、つて感じの人だね。」

と言われて、思わず笑つてしまつた。

くまさんの毛布はもう使えなくなつてしまつたけれど、これからは、二代目「くまさん」と家庭をあつたかいものにしていきたい。